関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

# 冊子の形をした「地財」―積み重ねられた情報としての財産―



| | |
|---|---|
| 著者 | 大西 正曹 |
| 雑誌名 | 調査季報 |
| 巻 | 160 |
| ページ | 3-4 |
| 発行年 | 2007-08-31 |
| 権利 | (C) 大阪市信用金庫市信経営研究所: このデータは、大阪市信用金庫市信総合研究所の許諾を得て作成しています。 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/7263 |

# 冊子の形をした「地財」

## —積み重ねられた情報としての財産—

関西大学 社会学部教授
**大西 正曹**

おおにし まさとも
1942年生まれ。甲南大学大学院人文科学研究科修士課程修了。
現在、関西大学社会学部教授。公職としては東大阪市、大阪商工会議所、近畿経済産業局、中小企業庁の各中小企業支援委員等。専門分野は産業社会学、労使関係論、中小企業論。著書・論文に『東大阪市中小企業10年の軌跡』、『東大阪の貸工場』、『経営理念の社会学的研究』、『インドネシアの地場鋳物産業』など。

私はこれまで社会学者として研究を重ねてきた過程において、それぞれの地域に根付いた習慣や仕組みに潜んでいるものの見方、行動の独特なありようこそが、その地域の財産ではないかと考えるようになった。そして、そうしたものを「地財」と名付け注目している。

地財とは、広く行き渡り一般化された考え方や行動様式ではなく、その地域や業界だけ、あるいは一企業だけが持つさまざまな知見、ノウハウである。また、普段は気付かれない姿で我々の足元に眠っているが、いざという時になれば、窮地を救うため有効な智恵を授けてくれる見えない知の集積である。

大阪市信用金庫が年に4回発行している本誌「調査季報」は、今回で創刊40年に及ぶ歴史ある媒体であるが、この小さ

な冊子にも、そうした知財としての性格が備わっているように思える。

つまり、この調査季報には、地域限定の情報が実に丹念に集められ満載されているのである。ここにあるのは中央から地方へ向けて発信されるような、公的ないし一般化された情報ではなく、その地域のその期間でなければ集められない情報ばかりである。

また、取引先との親密な関係を背景に、あくまでも地域に密着したテーマで取材・調査が行われている。しかも長い時間軸に沿って定点観測された生のデータが、他のものとは取り替えのきかない貴重な情報としてページの中に定着し、誰でも目にすることが出来る状態で提供されているのは素晴らしいことである。

こうした地道な調査とその編集作業の積み重ねは、地域の宝物としてもっと見直され、実地で活用されるべきである。つまり、この冊子そのものを一つの地財として見つめ、ここに蓄積されてきた情報が再評価され、地域に還元されるべきなのである。

冊子という形で積み重ねられた本誌の情報が、大阪の貴重な地財であることを、創刊40年を迎える今、改めて思わずにはおれない。